

恩納村沿岸のサンゴ群集概要（変遷）

沖縄県サンゴ礁保全再生地域モデル事業（2021年8月）

恩納村沿岸のサンゴ群集に関し、これまでに沖縄県事業（サンゴ礁資源情報整備事業 2009-11、オニヒトデ総合対策事業 2013-17、オニヒトデ対策普及促進事業 2018-20）の一環で、残波岬～部瀬名岬間を対象としてマンタ法により調査されたサンゴ礁斜面のサンゴ群集被度の結果を以下のとおり整理した。

最新の2020年調査結果によれば、恩納村のサンゴ礁斜面は、全体のおよそ半分がサンゴ被度25%以上でそのうち1割は高い被度とされる50%以上であったが、75%以上の非常に高い被度は記録されなかった。他方、被度が非常に低いとされる被度5%未満は全体の5%程度、低い被度5-10%は2割程度、やや低い被度10-25%はおよそ3割であった。これらの結果は2009年に全体の9割以上、また過去数年間でも全体の半分が被度10%未満と低かったことと比較すれば、過去10年間の回復傾向および過去1-2年の顕著な回復を示している。

このように、1998年の白化現象と2000年前後のオニヒトデ大量発生以降、造礁サンゴ類被度は低く推移していたが、2010年以降は緩やかに回復がみられ、特に2015年以降、万座や名嘉真やなど地点によって被度の大幅な増加がみられるなど、長期的に村内全域で回復傾向にある。

2016年と2017年に発生した夏期の高い海水温と強光による部分的に生じた白化現象により、短期的には回復が停滞したとみられるが、全般の被害は限定的であったことから、今後も引き続き村内全域のサンゴ群集の回復が期待される。

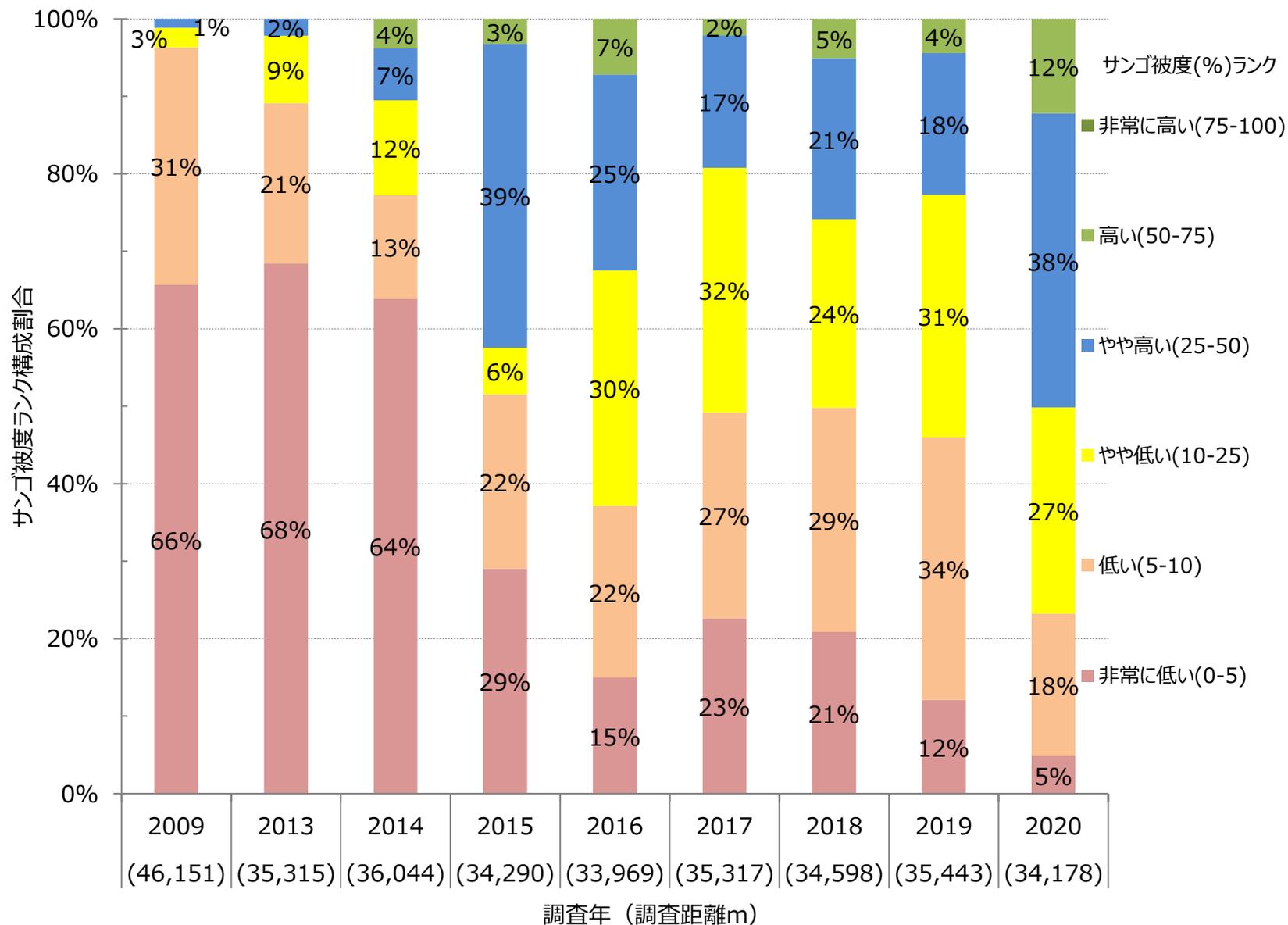


図1. 恩納村礁斜面の調査年毎造礁サンゴ類被度ランク構成割合（沖縄県事業：サンゴ礁資源情報整備事業 2009-11年、オニヒトデ総合対策事業 2013-17年、オニヒトデ対策普及促進事業 2018-20年、におけるマンタ法調査結果より）。

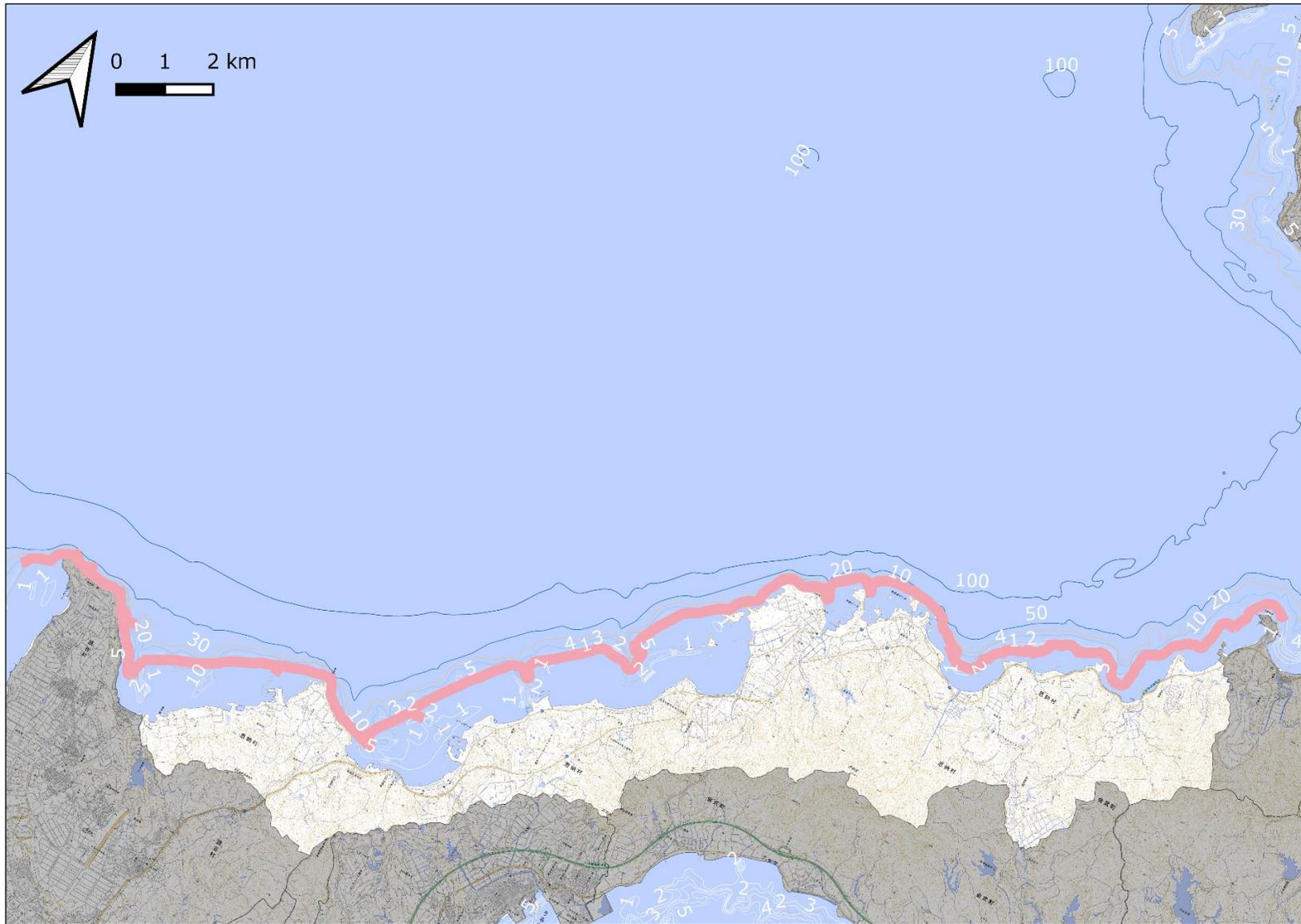


図2. 残波岬～部瀬名岬間礁斜面を対象としたマンタ法によるサンゴ群集調査側線（赤線、距離約34km）の大概の位置（沖縄県事業：サンゴ礁資源情報整備事業 2009-11年、オニヒトデ総合対策事業 2013-17年、オニヒトデ対策普及促進事業 2018-20年、調査方法より作成）。